吉野 上

古今和歌集序

やまとうたは人の心をたねとしてよろづの
ことの葉とぞなれりける世中にある人こと
わざしげきものなれば心におもふことを見るもの
きくものにつけていひいだせるなり

作曰詩正義云情於中還是在心為志為形
於言還是發言為詩とぞ宋朝の詩
吾朝の哥志をのぶる事おなじとて

花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけば
いきとしいけるものいづれかうたをよまざらむ

慶應義塾圖書館藏

作者云 いかにいつかもおもふ心をよみ出すをぞ
なけれはよまさりけると云也 詠は言を
永すといふ心なりけり
ちからをもいれずしてあめつちをうごかしめに
みえぬ鬼神をもあはれとおもはせをとこ女の
なかをもやはらげたけきもののふの心をもなぐ
さむるはうたなり
作者云 毛詩云 動天地感鬼神莫過於詩と
いへり 是は詩の徳をあらはす也 哥のとくも
この心なり あめつちの開けし時よりあらはれてこそ
あり

作者云 此哥は天照大神の御時よりはじまれり
まりといふ事也 古語はわすれたる様なれども
まさに女神男神となりて始て哥をよみ給へり
言にあらはしたるはじめなり 其をば [illegible]
かくれたる事はひとつもなし 是を
わかちさまざまにあらはしたまふ女神の御歌を
是傳へつる
久方のあめにしてはしたてるひめよりはじまりけるかね
あらがねのつちにてはすさのをのみことよりぞおこりける
ちはやぶる神代には哥の文字もさだまらず

まとすもはなみしてことれ公わたさるかの
うし人の世となりて下されなのみこと
よゐも世よなわもり一りしいはかろ
傳云すされとのみこと云ことの婚
ちしめ乃神るいも神れ次第よおゐて
天地人に次第してきひや人の世とあて
すされとのみことりそとと云詞のはき
それのねれのたことも人と以ふかくいもの
世一字とかりて人の世ふ意をも注
ふ世人の世とうれてすされとのみこの
世一字は云とまうすしりとも

かくてそ哥をよめてゐるやうしやみ義な
すれは哥ひとつ形は悦ひ詞はおもてにけて有
なりますな
傳云哥は神よふれて今のいろてうわめ
事を云出わ人わ心ひおかれとるろしふなる
しもと積へし気しわもまさとまちわるわと
おりかゆ迦らる神の哥の梅ちし
ゐるようしやを
鶯れなきふわてぬとふ梅乃香はし
露の波あたふれひ

拙くは我を見しられぬ拙なるをも
露ほどもしらふ
露ほどもあさうなり拙しとおもへ今これ名付くを
おもしろくみるやさしきおもひの許悪志ける
接合を施し給ふことく
さりとはさこころよいてころめてたりとはけれはそ
年頃をわたりて三弐の山をふりしのひたち
しりてわ天雲にひくまてきおもひのわたう
こくみこなれともかくのひとつ
作文者八行実六始足小作為山六起之徽慶之

ふ文をおもひ入分まやいちといふ五字とも沼の
字をもしも姓もわくは姫にいひをとしや
人のやうにしていふいちとて三百首
のに侍也見を売りして源氏清眼あつ
書をむとも地あとも詞乃にまへりいふよ
ひとは人々本事やおもひみてみ中になりて参の
東林也性一派ともあれ
跳波やまた乃ならの門のなりのめも山の頃
う孫のあふ主しりしみてはこたのいさ文母
のやまとみせそてかるふ人のみことにけ うす孫出つけして

作をみれ侍しかともそのころのもの
しむ人の此ためなりしてこれは年多く好み
けしめにふと志ろうと迄也と中義を待つものかは
文字あまたそのまゝもそれ事を手ならひするを
以ふ事よれつねにとそのしと云こうれ給へ
よのつかへ給ふにはへあつしての事也
此ふの四ふゝしめれ事

日本書紀巻第十一

大鷦鷯天皇　仁徳天皇

大鷦鷯天皇誉田天皇之第四子也母曰仲姫
命五百城入彦皇子之孫之天皇幼而聡明
叡智貌容美麗及壮仁寛慈恵卌一年春
二月誉田天皇崩時太子菟道稚郎子譲位于
大鷦鷯尊夫君天下以詔萬民者蓋之如天容之
如地上有驩心以使百姓百姓欣然天下安矣今
我也弟之且文献不足何敢継嗣位登之天業
乎大王者風姿岐嶷仁孝遠聆以歯且長足為
天下之君其先帝立我為太子豈有能才乎唯
愛之者亦奉宗廟社稷重事也僕之不侫不足
以称之夫昆上而季下聖君而愚臣古今之常

典焉宅主分疑須即帝位我則為臣之助耳
大鷦鷯尊對言先皇謂皇位者一日之不可空
故預選明德立王為貳祚之以嗣授之以民崇
其寵章令聞於國我雖不賢豈棄先
帝之命輙從弟王之願乎固辭不承各
相讓之
大鷦鷯尊既而興宮室於菟道而居之猶
由讓位大鷦鷯尊以久不即皇位爰皇位空
之既經三載時有海人齎鮮魚之苞苴獻
於往反更返之取他鮮魚而獻与讓如前日

鮮魚海人苦於屢還及棄鮮魚而哭故
諺曰有海人耶因己物以泣其是之緣也太
子曰我知不可奪兄王之志豈久生之煩天下
乎乃自死焉時大鷦鷯尊聞太子薨以
驚之從難波馳之到菟道宮爰太子薨之
經三日時大鷦鷯尊摽擗叫哭不知所如乃解
髮跨屍以三呼曰我弟皇子乃應時而活自
起以居爰大鷦鷯尊語太子曰悲兮惜兮何
所以歟自逝之若死者有知先帝何謂我乎乃太
子啓兄王曰天命也誰能留焉若有向天皇之

御所具奏兄王聖之且有謙矣然聖王聞我死
以急馳遠路豈得無勞乎乃進同母八田皇女
雖不納采僅衆掖庭之數乃且伏棺而薨於ミ
是大鷦鷯尊素服爲之發哀哭之甚慟仍
葬於菟道山上元年春正月丁丑朔己卯大
鷦鷯尊即天皇位云々

あさか山乃ことく

作云此哥万葉集にあって書古今かんむ古
注にそとりあり
うもくあ丸き海あるかれのかのもかてそわつへ来

作云義事いふなりへうふかうむしらは自歌にも
あらん人をもおもわり世歌にもいとくわきまへ
かくれ侍のみもかくそわくへきともさされは詩歌よ
いたりてあきらむへき事はうおよ六義の
若目ハ周礼毛詩文選この三にみえたり
周礼にハ六詩とて若目をあけて文選
にハ賦にいりて自餘の五ハ若目ハなし
毛詩にハ六義にかくの但詩にまかすのみ
なり也それ也へハ風ハ十五ヶ國の風にまかせ
風と申ハ言をもつて國ノ風俗いふ

やう歌の冠ハさ風せるわけなりも風と云也
雅ハ大雅小雅とて一天下の事をのべて奏
する也大雅ハ治陽の中の事をのべて奏
聞也小雅とかく頌ハ商頌周頌
魯頌とて此三朝ニ帝者の先祖七代乃廟
をあがめて王宮れ中ニ造れる堂ニて時の
祭文を頌と云也賦ハかぞへてとて一事を
ふまへて書を賦とあつくのべる也
これを雅とも云ここをもて雅頌情僻を
やうこし僧侶なとのぶくへきと雅店

あらはこころせよとかくもたとへ説をと
たとへしいふ興ハ喩也花を雲とし雪の
月を羽ほあやまりみこれ興也是らを見
歌もそ比とも云詩ニおもへ云を挫けるは
歌とはなをしくもそとへいふあるへしされ
十五ケ國の風をかくとて喩をとも書也
委賤乃するハみても書ゆへ此の所そ
引とて書ても書つ大雅小雅又賤に真
の三所いつれも可用
まれわくはそのちるとゆうふ

うつりきぬ世をもいかゞ桜花けし
秋の夕くれは末葉のおきのそよく
吹風の身のちくさみにしみけれ
あるいちよするかへる浪のゆるみ
雪と浪とよなけれ
むかし我こゝろみさしそ
草の露の身のおもひして我身とそうき
露とみしおもふ物と思へ
水のあはれ消てうき世と思ふ
明日はちかくおもひてはかなき世は
志らくものしもうらくもり
世中はなにゝたとへむあすか川
昔の人をそとひ和歌の朝倉山をみる
わか松山の浪をこえ
君をこそおもへそれ我もまた
雁中に志水とくとも
深山への野中の志みつをぬるめ
秋萩のした葉よりおつめ
秋なしのしたそよくらや
暁の夢の我をまつらん

曉の鴫乃はねかきのりもとう也
それ竹乃はしふしと人毎にいふ
世の事ねふしのものをさしてそれ竹の
吉野川とひきそて世中とうしこきつのに
おもわていは世の山の中におもひける
作云太古因兆典書いつれも序は正宗に述
表とくのありかれは序にはいさゝかも詞
らしくみる正宗のみなもとといひて
すこゝろのみとよめやさはいへるの書
いふすけなれと宗才の人の手にて一勘記

一滝はふ一此山も煙るゝなかのたかきにも
はくつれとさく人に云のよれとそをと明さあけ
作云此篇本の煙乃不云不断の幸あれ
慶子に題いまてを物先寿鎌倉下向
時為兼為相に同しく不三の由申さる
為相篇本煙と月のくめいやそうしきに
なるへしとよんて待にはとうくいふにおよ
ますそれ人幼稚にて故民なん道にふる
とくれぬやうそて母の阿仏にまちて別にい
うけ世ゆる風をさかれは不断の業に詮なし

こゝろへちかひの商家不案内の義あるべき
義なれども至て称しもいはれの抱も有家れ
儀なりといふ由をいふべし然ハ第一とめでたし
めりと思ふまするやうに見へ称すべき経武を
愚昧なるありけれなから一義に富士れ嫁乃
不起にハあらず然抱のなくあるまじひら尊寺の二義
左之わさて不附富士の嫁ハなれといふとも
りしまね事わんみなと云に起とも見
あらひ和也はそなふとわさ世にのらまく
哥に和のくさしへてとかくのあれと申上義の

あらそひなきを見て至極してひさまは
他家の義ハ同して用ひあるやとすれ
あらむしと称しの事不可説の事として世の義
なしい農家ハ小もさゆて極し事ハ
さきをもてきらしなき不便の事也ける
抱とも世を子ゝめて家督ハ何も至の抱そ
我ら知らぬとのきまゝ流きて上下一万人
作ら業とらく申ハさよう可候
八業にをいて然る相傳の家督まめ
称して之をへしらして道をはこのもの

道の秘事とおもふ事あるにや居還
迹にかゝり争ひさそひて論義して相論の附
事ありて両々に帰宅の附せきさふ丹後入道
夜陰に来りて錦の袋の中より書状一通
取出てこれは頼之古良入道に披露
頼之と丹後入道状云端作略してさてはてい
やゝ久しく案じてよし承れば頼にて写とりて篇古乃
嫁の事をぬらしてとよろしく承りて丹波文も
不立とそようあれとや人を頼み比道仕文を
りけり状に跡とあひて勘付られて云河序

ことやらん候て其斐乞不乞不立不
勘事候ことやらん事とれ果されんや
家の義不勘ともか事ハ一ツゝゝ
直にて承れ女性なとにも哉ゝゝ
以下略之何事とも吉々て不立と
申累祖筆のかけともいつわりと紛れ
正説在心
かくほどのうちあらなきれ時も在之
まれあるべし
御云れ付て万葉集時代或文武或聖武

孝謙三代或桓武或平城天皇大同天子の
撰云々家々異説也此中に平城天皇御
代とする義は古今序に年はもゝとせあまり
世は十つぎになむなりにけるといへるは
平城　嵯峨　淳和　仁明　文徳　清和　陽成
光孝　宇多　醍醐　已上十代
大同四　弘仁十四　天長十　承和十四　嘉祥三
仁寿三　斉衡三　天安二　貞観十八　元慶八
仁和四　寛平九　昌泰三　延喜五年まで
百余年然ば十代百年にあまりて古今は

貞観の御時万葉集はいつばかりつくれる
ぞとゝはせ給ひければ文屋有季が哥
神な月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ
といへるにつきての義にて也
文武天皇と云義は證拠なきにあらず此集
序にいにしへよりかくつたはるうちにもならの
御時よりぞひろまりにけるかの御代や哥の心を
しろしめしたりけんかの御時におほき三の
くらゐかきのもとの人まろなむ哥のひじり
なりけるこれは君も臣も身をあはせたりといふ心也

ときに於て人丸ハ持統文武の聖朝に仕
へて新田高市皇子にもつかへりとみえたり
はつせの池乃御幸にさふらひて作せしう
たくれるときさいの池の玉もとそみ给ぞ
なりしことにふかき歎の事勿論也さ
れて持統時にいりてのちあまりにいたりと梅
又持統時に至る年はよはひ一代は十一
にも及なりぬることをきてけしめるなれは
いはゆる終の持統時にいりて年あまりさ
かけて文武の御時に至年あまり明らかなり

何况年又同の撰と云ハ家持中納言とは
見えたれとも中納言に任せられしの撰乃文字の言也
此外に撰者とのせられたる作者これある故
但十代百年の事は相違ありて文字をかく
時代をしるすとも書事和漢一ならず多くは則此
集の序も假名序にはいはく此さね海とおもひ人より
ひとりふるきとかき真名序には纔二三
人とかきり又文選の序にハ時移文七代数逾
千祀云注云是代謂自周至梁也ある途代也祀
年也言数多年数也歳唐年代記云自周

至梁十二代殺而稱七代白氏文集云花園
百云々抱貞観云年規録云三百九十人云々
後江相公詩云稚儀入室書千巻々〃然云
書不讀五千巻々不可入室云々文時云少樂天
三年云予対四二年弟也云 云々加様の證文寄衛詩
係省略之取捨文武を撰しめて聖武はお
くりたまふ殺文をいいてしありぬべき事也
此事康永四正廿慶運傳授之時御義大旨
同之但聖武之義不可捨遣為其義両〃用
文武也

いにしへのならしよみ哥とて書わたし人をしへし人おほかりけり
ここれ事といふはゝさくらのなかのはなのさかりや
すさやうるさいねそのなかにちるさき世のその
落きこしふる人たちするしら僧正遍昭は哥れ
さ海えられしも浦てとひとくめつゝ さともて思ふ
りけるなれとよみてはふつゝまんとうそすよみし
僧正哥乃とけき枕よの一股よろつくまとてす
くるまきつゝなといへるへ仍也
ありはらなりひらのれいあやかりてとしいへるなまとと
志いあうき花の名あるくて母得見入ぬることなきこゝちし

作云心あまりてわりなしといふ事也
かなしくつゝくも自余准之
こゝろなれ人こそ名をこそ野をおもふところの
たとひ日頃こゝろ持まさりまれにはえらひてくしくは
おかしくも云とも思ひてそれさへ論すへき也
作云花は見えても所をかへぬ云ふ人をいふ也
作云の作者は人をもわかれといふを
付てわれらは喜撰濱成と云或家通娘哥
なとゝふ人あまたや山も清輔まての流様事
周なそて西明以下古人といふにきかなり

梅とかさなすしけしめて
作云春部をおもふに見えも鶯なきしにあるを
ふ梅花折りての後もむかしの也
なしきすゝとさて
商頌周頌之又三体はいつれも云て用されは六義を
以て言ひは風雅頌の三篇賦比興の三は
体也云のは春夏秋冬恋雑と篇にかへて
六義みな猿すみかれは諸とゝまるとつねに
和らしくて見さされは其に六義の名目は
そうとかりてかくそくされと義理に心得す

とや諸家一同読教主記まへ忘れの人のうち記
をいくつめ事あやそのゆへハ古今古注も
むくさ小ヨりれんしいえさんあるまし大かた
事まあんと云此事ハミ毛詩よかつゝ
てめし詩の正義云賦比興の別と云子
孔子合於風雅頌中孔子前未合河賦
比興別為篇卷ミ〻依之瓊渓云一曰風非風
風之風五曰雅六曰頌非大雅小雅之雅商頌
周頌也詩同云風ハ風也教也凡風化之所繋
比風世賦者鋪陳其事比者引物連類興

者因事感發雅者凍其正理頌者美而
祝之云此文ハ所々古今よ二の一所あい
云義にゆらう叓すされハ毛詩よ風雅頌
篇とみし賦比興ハ辞とみしハあまし
するといひて委ハいさ所々正義の文子
憑きて瓊渓ハひろく凡述の古今にあつ
きぬつい〻て〻世ス文を云口和
一毎ハうへの所有風みをとさへそれ所事
作云是ハ所有るにて所ハ所にてもの事
事称りも何事とめと云ふる文

義理あるふ言の也假令かくまでかたらん
言也されは云義ならす自余の文字
とも申すへき事とゆへの也らたし
うへ言ふりま詞とそて大がさぬ
持へるとすつ言とかへりやうにりす
あるなかとつ子冬さけの梅の花の春
たれて文字もとかかるまりわきめ
そのとめへきぞ風の字とちてとふ
かしへありて風の緑いかり地そ
樹とうかりてあるへきとし木に風の

時にあつ称もとうこそ世にあのつよ
二ノ句はかきへ言の
作云是ふ事とも海ぬ所あかへかて
云也文選賦の故ちて心得
三ノ句はあまるへ言の
作云に此是ふかよし白露のむもとふ也
めつさ言そろみて何くつきと云ひと詞
のふこ志あまきこゆゑ引物連歌と云
小うつ其何の化
四ノ句は花とよへ習

注云範とは手本に歌の人月よまりみだらう
みるよし云也さらにあるまじく

五にはたゞこと歌

注云ことはあきらかに事をいひてとよくは
直なる中たゞごとゝいふなり。

六にはいはひ歌

注云これは文選注に言頌古注に世をほめ
て神につぐる也と云々又注にあけかく
むかしは頌は讃のやうなりいはふ文なる
心なり

歌の世中文字はさき人の六義にあらはれたるに
わたる言葉なきことはいでくるは
この歌の家にむかしの人も見ゆることはり
てまめなる所には範をすさびいかでさきこと

ふもあるに
係云これは世てりんの心おこりて心をよはる
やうわさ海すゝりて云事をことをあらわ
し様云の世にかくとの世界ういの詞を
かきうすへいまさ行く云すこと事との
あつことふうきこ心の事也およ今宝海
うけりくおさうくすうまていく衣量
あとろうつう心こうあそ云のらい今えき
さよくもすきつれ世みかくうんもてはあ
あす又浴の泪を世しろくももゆきゆう
かこ心も心うんつきいは序にても見
みるおちて又是れ説心あるさかゆわかとてうき
あるわろうす花にてそみるみむいふすみるて
説きけもかと花さしてて見るはたら浮世
妙法蓮華経とるろけ古もはちすい説も
見る旨にはまするとと倫うなす経の
名にもあるもみ中になるしてつけられるき
より中ある又詞は書かききかなくいわれは
或よりあゆとしいまぞくて万葉集目
右紀かみえこふさせききてふとあへおかに

あくるしひよりしめしよく以てしかも悔さ
さく宗すしき事とさうとすゝめとまて
侍りもそ和歌よの不堪なりまて寛宰い
遊ふちえりて云れ後りまきすれしもと
姿ねさうにくとよりす詞の吾要よとの
みなそこしもとらとなりけておりふさ海は
しひおもにわりもともがすめくそしかるる
たよとまよ日位埼事道れくの国のくめ
いそきみけりさ与人丹無はまうこやとく吾
紛るくるね都鄙老儀みの男しひ后ふ

なかしさ知りなきしふ宗き事也我身れ不
堪なれかる人の心ゆのは道よりの心ゆりの事
此道の冥加神の世めいるそのわりすへきいわ人
よ凡心れ人丸とあり四百前よ書とれ備への
志ある也にして筆り習とよ国の守ちゑ
とふ云るとよれ事いなるの事にわかれ
相中人よ歌種し天田よ出ゑと思いるとさ
中事也とや見まことろいきぬある筆
みえぬれ秀逸のあれなて清事なむ
あしきえらしとこきはまさて捨れ座

割ある小理なり世の人よくみてかうがへ
渡の事とぞおほえけり不便なり
給は文はた人の分才様衣の事に心を
ぬ志いしは分きてさるゝねゝむや衣ぞま
武人なるべしさしあり衣ぞりとよそつけ
猶氏は弥当は出家をすゆるに云をと
こうかれぬこゝの世の上さ様しとかく猶東宮左
衛門の事やおほ古寺の三尊はなる
のあかれぬを行ふ人氏新は尋ねさんへやむら
ほうもしと横ゆ尾自讃の中にもい毎

されば古歌にも入道中されていはく天下の
傾城の色ときくまでも人のかうけは業捨
様取息因果にれとれ人の傾城まつる衣
ふし事もみつすこふうけられそはまで
の世をいゆうり当きのかしおぼゆ
うゐるめとおもへいはぬへくみんなあいあれなるの
みしと書る歌の朝秋の月のはなまさに似る梅
人をとめてこをいふれて言とならてまつしめ給ふ
あいるをともふまでたれみれなれは海ましありて
月をおりふしまくうへくまさやをにいかねるよ

それ日本紀には、かなとうとこそもちゐるめり、さるを
和歌の事世の人のおほく用ひ所なり、但し諷諫の
ためであるをひらきて行ふまことのまことにあるにて
とおもふなるそさも事也、教誡のためにとりて
國をおさめ民をやはらぐるわざ也、世の人漢家
の中には政道にあらずとおもふ人の歌中
に此の事をしらさるをあはれむ、養関にも命
ありきくもこれ道にありて二ともにあるも
なとるもとは神代にあつかひて漢土
にも毛詩に言ひ、道とてはいたりて風
刺風化のおこなはれし治國の始を
あらはすといはれさり乱世にはまた人
君の無事をやはらげよに絶て尊きにありて
昔れ候すまそ
行ふ者に此につきて君をたすくること
ほくちはのこれ数かなれと君のたすけにまさる道
よろしき事にすきたりひとつすなはちあまりに
かなはさるにつきてかはつひさにはらにいはまし
守道にてさはる音に神まつらさるべき男に
ふしの程まさへて人をもさひ

今されぬ思ひ出せしをきのふの山に我身なりけれ
松むしの孫子そへし志のひ
春さめに萌しやすらふ桜そ孫子なりけり
名もたかき松のみ松ておもひのやまかね元
ゆかりの世とやうさむき御代松の鶴かね
我人ともゝこゝろしらぬ末に吉野の松にて世をかへん
松山の昔を思ひてさかへつゝのちも末よろつ代
たかさかの松を青海の滝にわかつて地をかへ
秋のよはまち女郎花
夏部 河風すゝしきにおちかへりぬるとまきの
もろこし

紅葉をたをり
秋部 紅葉の錦にまかせて
雪とみるはなのかけまて
冬部 おほはらの雪の上朝月をみのまそほ
鶴のよはひをしるもたかきをはなれ
賀部 露もちらせぬ世のちからにて
秋くれは萱草とこそいへれこゝろ
恋部 宮城野のもとあらの小萩春とふりこ
枯そそめ後をわすれ萱草の
あふ坂の山よりくたるもちかひかな

別アりしく別も称ゑあふ故ハ
春夏秋冬ごとにいろぬくきくの哥など
新ゐる故也
うきぬくらこしえの部也かし正くうた
ろくもうたきく若けはあハの事のうきを
かいてせハ
作云ぬくは此集也序をしくしむ也
大序と書くぬふらきことよぬうゆ
まく同ゑ之ゆ進ハ真名序に某とかいろ
我を枕詞とかりへありとてやうくハ彌と

たゝふ元大方詩奈序自然の句にて
此早下の句を書歟

古今和歌集抄巻第一

春哥上

鶯のなけ道のうへく
こゑくち人あきぬれともたゝ鶯こそ時鳥
えくく來てはと心もとなく潤の珍はこそ

ねかへしぬしにあらかへし鶯に問あるにし
ほとゝきすへきあてあまりて誦すあ
あらいひこれを歟
春たて〻起て出ゆくの　柳さらなし
柳しけき遥ゆゑ心や我を起てけり
それは置ぬれ柳かしそのちかひそへ
さる日野の名をふたつやえて
是は時のあら所に暑をほとしとあら
也我詩の言之響をかしく万葉
集あてぬ流れいたゝ置の丸きしあつれ

海恵に近年しく向かひて山の人
詩あり
かにぬかふとの名ら　世所波瀾
春日野めてはぬ己述をあみ御幸ふ
以雅しと云りと中世所ゝ以中流不手
気を兵故ハ年漢朝にむかりては幾全
城よ年あり武を諸国にある也
勝まと名をそそかれたゞ化所に燧火
をとあやかれ火いかよりてくるるけりもかれ人
時の頂よ千里しそ〻乎て此とえて

うし中山なとよむかの何咲乎
如斯にしたきたなそこりすへきにや
歌によるへしいつれも一説云春日明神
鹿によ清き流のくゝめ垂迹と思ふ霊魂
あるいは鹿にかはりて常に
又名春日縁記より明にて御鹿の露
三笠野に若菜摘て万世といはふ
神そ云ふるしと社に読にく侍ん
春日野の野守とかかくみよすへき縁
不老なるのゝ名多く侍翁又松の

とりといへ前不て用。
深山よみ松の雨なとよきよみかくよ
遠山京色に尤もよ眺望故に松雲
霞くもりて消ぬるにいつしか都やふ霞
若菜にもたゝ云へ心は春の霞かきて
やよひより松をもつらぬいて雲れ
都ちかくなる処にはかすみよく縁之
椿をとかく春雨。
中きけるに侍る人とく文字の松を
みなるくてかきをのこりたらんとみそれは

さわれ生え。

かはすわらの常つきや　神々すのへくく
天へくといは延くや神ゆづりてすとい、ろ人と
ゆめすてしとえりそ
わかこう夜はつかさめ　せことをいわの夫之
杉そこのしてとる兆たり
ともちより内に流の春ら　百千鳥之春の
日すふくとありそくんくつかたる口と兆ねて
流ると讀みて鶯をいふ事不の名他紀れ
鳥の中より鶯なりとをきもやきくすいわかか

地也
地ちちちとりり鳴みかにあり不可用

遠

遠近乃そもつすし知りぬ
かちうはかいは遠近也だれとも知るわ之
喚小鳥何かくの声わか鷹たるまさ
鳥といふ名なりわあるとて何鳥何鳥
とちうくし奇ありその鳥と讀事
みる事更にたる庵て山鳩すと
申人もありね鳥春かうたかり
ね鳥尤詞ととあく秋すさて讀れ
秋播て不明りて桝の山寺法師得候

鶯ハ申鳥とうけきて傳へく納述百葉
集ニも見るのみくとよしいへると讀り
古ハ言ようふ本為る此鳴門記ニ得秘法ニ
いふ則鶯也ニ云ふ不でハ外ニ字之
かくゆゑのかさ世ぬるをいふ梅乃花
鶯とん樹の中をくゞりきてよふ字
とこ得めか歌ハ不て能唯梅ニと見り
しせてくよめるん何条事歌あるん催馬
樂乃青やぎ柳とかくさかれろく
鶯のぬふてふ笠ハ梅の花かさと讀り

是もたく見り昔ハ多くしめれ
梅花笠白ふうを色ハくろく者也
へハ助詞なり
春乃夜の闇ハあやなし
あやなりハ甲斐なきと云ことを
義也てハかくなり
ものとあくてめかまぬ物を
くるとふてハ明暮もめかまぬハめでしる字
どあなりへ咲のへのひかし又同字なり
とよゆえ讀りいつまでにて於枝也ニ只め

に迷ぬる人のはしともハ未た旅
かくさるよりんやとかハおほ
さうしとハ貞也昔のままに有のこと
敬虎くる乃庵主拘也
うりてきたうちたて夫すりて云翔九情之
言ハとくて猿之猜案ハらなてき申す之
山乃らも人としと花のかみ
すきなぬとハ不叙と云之極とあき也
讀之手極おしとかくよすとすり雨の
みつとまも母すしもとハせ忘たり

みくのきや人に如くらん　家作とハ大意之裏
そこかくり世俗にふるらし
見ん初せハ柳櫻なとこ夫のをく
かきさせてかりかたとり歌く
足案の山のはしわおり了ゆくの義
おの類昔ハ人にふれ山にたふれハ初當母
迷り別れておいきつとハせ云り又三言汐
深大君乃中に山をも尾にく道をも失
てあおとりくゆえて式ハ稚たし天皇也
よ入く時ハ特く端くも見之ま挑とる

たてぬきとは紛敷といふ此事不審
此帝女帝御ゆゑ又鏡の山を替とそ
分ともて我と是を果とて本桜によれて山
磨木の山とはいふ也しかれは太山方
いかにてもあるへし下山をいふなんかく抄有
ありはあらはれたりとみえてかりすん
桜花さくらせろ
是も吉本にかくれたるひとゝかや春
くれぬる年ゟ人の心よりおもはれしとよ
花のせ下の字をもとてぬれともよめそ
きぬは緒たいをほとこし此心ありて云たゝに
いつとても是をて桜花咲て下りゆうえと
の哥此やうよ初句をいはぬくおもはれ
ぬ之歟今や桜花にもしもしと花附
春のくれうたる年たかてちとへ人の心
ありおくましての此ぬそと読かな御哥

古今和歌抄巻第二

春歌下

春霞たなひく山のさくらはな

すれ給ふくしといふ事かはなはたせはく
ハ文字かゝるを申は付さくはゝちんを
とかゝ色なんかゝるとも讀候へハ所さ
世にしもへ來ありやおかしはやゝ
ありかくよなるにてかはるんとやかう
物よ文のゝるゝくてハなんて今世元
よしてといふなからそれハことある
たくハけてしといふりちるはゝ思ますと
物あくとりよめるなり
かハはとの世々もはかるゝ花桜

花桜といへハとくらゝと云もあるを讀る例の
かハらぬきく歌申人あまた侍り桜花とも
桜花とやうかゝやうれはとはハ言躰之也如此
とし物之候すゝてよめる哥ともあれハたゝ
蝶んれあるめ万葉集よりは蝶とよめ
るよりはくつきしかにもよめる哥あるへし

春風は花のあたりを　よきてふけ之
心あて花をかはそらゝくゝ命之
花の木もいまハほりうゑし
はれ木櫻也

いさけふは春の山邊まり
暮なはなけの花の蔭かはと云之
これくてこぬ物也入哉
人きゝていふことを當世のこと
すくなくいはぬ物なりといふ事也
本つ人といふもの又風よ
こゝら良多七ありく鳴人に奇也云り
何のおくなしといふねといふこと書かく當
此ま出てよりこる物なく物よ而にあらつ之
古今集に遊來のやうよ奇也題なり

これことかすあのたいく題くとこゆれと
霧すなたてりいふことよみて也行ろ
山の名のありさまふのそれ法皇西山よ
於ていふ名所時のそ京すら人より梅
又此時代よ題の奇をよみたる
とかくゆきゝ逢明るよ月入花難暗と
此題の奇新古今よめてあく在原の
組にかゝりてよめりつるよみ
霧すあへるもこに梅らん　駒すゝめて
梅も春の山邊とよみたれは　さゝ

道てはりあへぬとてすきやもせむと云之

今もかも咲にほふらん

いまもなりぬらん今や咲らんと云之橘の

小嶋の崎山ぶきの名所也

わたり井手の山吹咲よし里

是は橘太臣諸兄公井手に山吹を

うゑられの盛なるをこもらせて薨じられしと

續也やはりと井手のさくら色かりと云々

折あれは咲ぬる哉すかり

春つゆてもよりおもはれ立る春よめる之

古今倭歌集抄巻第三

夏哥

哀てふことをあまたに

花のてふ事は事をあまたによそ也

咲く春の後に咲ける之哉花の残

あはれとやあはれとは哀よいふとて嫌

とい桜の一つ残りてひとりの咲くこと

例のことかはなるべく

ひとりさきてうつろひきつる

そもそも将之又とゆかのし
いそみちもまかれたゆかしみ
比叡山てはかさみおもの峰のことおもしろく
よは見るくるハ深山動あり石とハ山道勁
くもりく雖然とも人捨てりや
此事不可疑ていそのことふるとふ
こなりてある家の山すてハ不同也之
からさき浪のぬれく里也
汝鳴里のゆかりれ思ふとすかさく
有りありとはあるるや 旅長鳴之

是ハ浅きの山也さん
江のふすらそてきある布すると淋なると
ゆうらくもろとうりてもことのえ
山とは是時吉野山とも人見不可用
足利の山かぬきまて
ゆりたく井のあゆく松の事くさけ
くまくとふて
やもやとてとこれしかえて
風さて御くて金足よ詞のなそけく
寺の山とわかしふとうくもさん世まずまり

佛のゆるしに（?）まかせ縁之渡世として
ともにありとも人心あて用
五月のやみにまよひけり
とふ世ハ動揺之夜あらハ夜不静と云之
孰か世をかなしみけり
我世くらかはるよ憂世中にゆるとも之
こちをて葉のよるはにかね
あさましく明暁にあかしても明ハ人をあさむ
きりかくむはた蓮のつゆくれてけさあね
胡蝶の夢をさとして露とはいはれぬ

思念と云之物とハやすからぬことを
人ならてたゝ身ハつらかりよあはれともゆめ
ひろれハかくといはてりとさゆきあ
又之法蓮華ハ流によつてゆきあれの
いそとりちかへをとゝ露とものなりまいらせ
おもふ人をとらすそこそ之
夏と秋わ移りかはりての
うつりゆきぬるあはれ哉倚之続之

古今夷曲集巻第四

秋歌上

まきこうらうておもしろきを
うらわりはきの相のあきさやかなる花
や裏はそをもとこは丈如通用の朝也
身は秋そさうくるしり
はるそのし手にいりののおちかなるは
たうしくきてよなりかわりとさ
あき代月のこちをとくしり
雨裏を舟しよこれおのうれあきの安達

七夕よかしはのつとの
おもふことくはえてとくとしらぬ延
かしするのつかまいて
くんそのえはれ　乾真会之ひとつの代也
白雲らよく揺かうし
新さくといふて今年の月ねかひくれし明月
ゆかしさいらしきれ
秋月よつまかをかめ
山名清輔朝臣の不くて前とはくさらは
てまのみうき事之まふとるのかね

ゆかしく都ゟくていなかびたる所をか
らもてすりなるかをあそのらてしゆゑて
又国々の風俗世く草木鳥獣衣服并
とりもて同物に付きてもかはりの言
葉なれは国々の事とおかく分れ草木
のありしかりもなとりわくれ細かに此
よくかなみくきものあかと今世は
うしよゆんとえけき事と付くて別に
すかつりもかくし事ことくいふあて寄を
えよりぬ物のえけむとすかや見え

又武の事はうちとみつきくありて武も侍
正風やうと思ふ原はよりて武人安藤国風
俗に庭折とふるといふものをれとも
来是は何しりかんあふとといふれかのせ
るれをくもていへと来つて思ひましやよ
日本記によみてわうしくれをゆりしあり
けるやいかたかせたりのこかきてれは万葉
の多代といつれけりのなた武かりさるよつき
よまれたりつや生二飛に寄に玄随
ていまかりをとりぬ鳴ゆ人に浪やゆかす

のこかまてと読り紅葉はおゝく黄ハまじりて
下せてあまり麗相せる黄色の相あま
之お色源氏の秋公もし稲扇へ入と書
いまわかりをもりと別字りこれせ上の山
作りくとありぬつきま事也
秋風ていふも心をかけておゝくて
詩よ雁櫓と作りしれて奇もし読也
あれど作るようのひまと書
かまへとれこ山とりとよる人山下帰まる
雁もきけもうにかでく

あつことふきく也は世まへれてハめぐと
へさやうとハ彩りれぬとかなやも須やし
雁　萩のうるえをまきろめ
本てれ也くて古枝よ花咲萩之榛也
ことハけてわかきさや
萩ゝ花ちるん女をぬく
霜と露也や此中よとて露時のうよ
をろる霧と云萩例の物云りうもいかに
物云ん申す事之露を霜を読へ（十二）
秋吹るまやとりぬいもふ風の

をとす千此石のむかしはさゞれ石ぞ
かすみて野辺も新年とこそいへや
今はうつゝはかれし
蔭のかはよる此は物かはかれはや千
ときそそりしやちとせきの翔之哉云ふなよ
うしとこそや岩のかはよるつもる脇
されどはいにしへのくろきして是の
あすはぬ雅山のそれとしこそ深也
たちあきまよあるあ柳の
鈍耕これを何あらむとすれども

立風のさきぞはやきにさましきさよふけゆくぞ
水辺たち合の中此あ郷の事も
まて雨の末よりはやくふそてこそや
我のこや紋をわすれえん
此花そつくく添ふすれくれたれきこそ子
またぞくまつこていつ玉ひらくれとこ
まつりもいつ書のこ気をこそ翁はせう
ふりすそく人見はそてわりつゞめとこそ花
八幡や帆気幡のわりつきく
よきのあの花のかをもやすく

一百草おほくの草をもいふ　たゞはやんと
いたつらもんと云義とくさといふ百おほき
月草きつ草くつ草　古今にも
あさ見てかくはしく以上してとかの也
月
月草よるとてはいろ
月草を鴨頭草とかいて露草は
よあり　あふひの花をさもいふ花之
くらやまれ花のいろや
是はあまそ人いふかり
わかの野之薮とてよめり

古今和哥集抄巻第五
秋哥下
香もなく露そ鳴
かくおほれあるの原大和出在之
千早振神のいかきには
あかきとは不肖といへりあかきとてふ
かゝ事あり
菊つくる人やしにけん
陶潜ハ不能賀か至元使ハ讃王前之也
ころ事よらそ

一りうおりしきくのよけ
大澤廣澤同池也 仁和寺にあり
みやうの色は秋のすかたなれや
今色しまへは秋はよりく色しと云也
うつしかへは不可用
おく山の岩のえだの葉
いつくえりうらは山家の心よみなれても
かきりなく我よめる紅葉やてる日光
帝王よたつ人読るや武家はいはまたしかの
秋葉かよ

ちはやふる神世にも未ぞ遠て・
ちはやふる神さゐるまへに元禄人
すてのきうちるやうにいふ物の神すとも云
此も云う人にも早くいふ故に道
早法元されて万葉よりるや人らと
例こうしてら竟は道るやきなれよ縁て
之読にし神代にきくはまとは前しきらに
とりで心元露葉の下とおくれて読り
讃とてみとも学すと
ころくりあくらくたりあり

よろ此郷の事實〻氏ハいやしき人
なく行ろう會社山の大守まゐらくか
國よかゝりけん郷と共くしの行かと
しとうく古里人まいらしき絶さ之
けんともかへるくなりて山かたら也
秋の山りみちとおきて
ぬさハ金銭散米と神よま遣旅人ゑ
つきぬ布の數納と道神郷みな道の
祝りまねくすの神よまゐされて祝詞
ちら谷はぬさ神よゐやしまれて行すまりら哉

ためしたいかうをとらや
かゆいてあぬ山田かもかとして
旅衣こハ雲眼とともいふ也やかたしきなる
きそら下不衣かよと之
夕月夜とてつのゐよ
ゆふべくまとハタの月出之とてとも作
くもとそく枕詞とそろく暮秋の池酒
山よ月ころやゝうてとくも雖紫てト人作也
小山よ僧正遍昭よりくり
たからりしと松茸出きくたや

古今和哥集抄巻第六

冬哥

夕されハ衣手さむし
ミよしのゝたかれの山にハふりをくさゝ庵
ふる雪ハかつそきえぬらし
かれそけぬらしあしかれくそきあらん遂
山の瀧つ瀬を山川のおちたきつ瀬也
浦ちかくふりくる雪ハ
末の松山波ハこゆるとハ昔男女
雪ハふるくあの波ハ末の松山に浪の立ん

世ハりやかれんとあつかしきためし也
いつりかゝりかとれくかえてと浪こそ
こふしいのゝ冬とや
梅の花それとも見えて
あまきるとハ天雲とかきり目きりくもる
ゆきくもりちりくるとよめるといふなる
のつらくあまよりちりくるもの

古今和歌集抄巻第七

賀哥

我君ハちよにやちよに

千世やらむとかさね我初之千代よ八千世
ましますとてちよよゆるしせて以来
不可用之由達石とは祝之
わたつ海の浜のまさごとは
まなごとハ渚海の砂石之岩の岸
ありかそへてといふ不可用之
我よは君の八千よ
岩やうちこそ以来不可用之
桜花ちりかひくもれ
かよふ道にまかふかとの心也

かめのおの山の岩ねをとめて
とめてハ岩のまなよおちて滝ハ岸ニ於
山を云滝つ瀬よおちて山之岸よおちて
いろ山之ことゝくれとあて同事也

古今和哥集抄巻第八

離別哥

たちわかれいなはの山の峯に生る
いなはの山因幡國よありさらハ国司也
ありける時いふ山の名をよみてあるなん

さをしかのあはれの萩かな
すかハ鹿の作りものにて小舟之用
あさまけよミつき者あり
鵜のめみのつきくらしてたつりけと也
きことをしかつてよめるや
山さくらの初すゑのありさまにて
初すゑのとりハ大和国之所名にゆくゆゑ
山さくらの初すゑのありさましてところを
いふ是ハ山陰の西よ同若狭ハ今世ハ
かまへの森てトかの初すゑと続つき也

あふ作りの室ちぬさつき
此をあしと読るよそあ作りの衣すり
いふて開さ作らくとも寸服さ也
歩尾ちの当ちの唐物の作りハ
遣唐使や
かすくらしらそふつかん
こふハふつ作るをかくおれ袖ね
て人とらめんて読るりや衣迷ゑる
らそよハの次

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

110X
244
2